

## TOPICS

- ① パーソン・センタードな心理演習を目指して
- ② 選択制FDの試み
- ③ 成績評価分布の公表について
- ④ 高等研センター年報 第10号の近況について

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#1

## パーソン・センタードな心理演習を目指して

### 「パーソン・センタードな 心理演習を目指して」

筆者が今年度はじめて担当した、「心理演習」における取り組みについて紹介したい。

本演習は、公認心理師養成科目のひとつであり、ロールプレイなどを通じて、心理援助に関する基本的な知識や技法の習得を目指すものである。実践心理学科における本演習は、複数のクラスに別れ、それぞれに担当教員がつき、実施されている。養成科目として求められている事項（例、心理検査・心理面接、多職種及び地域連携等）を共通の軸としながらも、それぞれの事項ごとに教員の独自性も出せるような演習設計になっている。

筆者のクラスでは、特に心理面接に関するパートのなかで、パーソン・センタード・アプローチをベースとした演習を行っている。著者にとって馴染み深い心理療法のひとつであるためだけでなく、今改めてこの療法における基本的な援助姿勢、すなわち共感・受容・そして純粋性（さらには、それらの統合的状态である現前性）の重要性について、履修生に肌身を通じて少しでも触れてもらいたいと思ったためである。

以上の思いについて、もう少し綴らせていただく。これまでの院生や学部生との雑談のなかで、援助者として「正しい」話の聴き方やアドバイスの仕方など、「何をするのか（Doing）」といった技法的な側面への関心の

高さからか、技法の使い方の正確性等がいつのまにか評価基準となり、自分は「ちゃんとできていない」と自己卑下的な反応を示す者が少なくないと感じていた。たしかに被支援者に対してよりよい支援をおこなうためには、技法をしっかりと習得しなくてはならない。しかし、技法を習得することだけに意識が向きすぎること、どこか彼ら彼女ら自身が本来もっている／それまでの人生で培ってきた、素直な関わりの良さというものが見えなくなってしまうのではないかという印象を持つことがあった。そのため、技法の習得の前に、まずは「自分らしく素直に話を聴き、そして、言葉や姿勢を通じて返す」といった、今の自分が持っている他者との関わり方を丁寧に振り返り、そして、それを練磨していくという演習を行ってみたいと考えた。そのような「自分らしく聴き、伝える」ということに触れることは、現前性をもたらす自身の主体感の再発見にもなるのではないか。そして、そのような主体感は今後、多様な技法を自分のものにしていくための基盤になっていくのではないか、という思いがあった。ありふれた言葉になるが、「技法」に（私が）使われるのではなく、「私」が技法を使っていく、という自分の主体感を大事にしながら、心理支援のあり方や技法等について学んでいてもらいたいという願いがあったとも言える。

（次ページへ続く）

## 先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#1

### 「パーソン・センタードな心理演習を目指して」 田中寿夫

実際の取り組み例についても、いくつか示しておきたい。心理面接の演習パートでは、ロールプレイと振り返り（ペア・全員）の機会を多く設定した。ロールプレイでは、事例性のある相談場面だけではなく、動植物や物など人間以外のものになりきって話をするというイヌバラ法等も用いた。イヌバラ法はあまり知られていない方法であるが、クライアント役は、自分の話を語りすぎないという安全性を確保しながらも、その役に伴う体験性のある程度深くやりとりすることのできるユニークな方法と言える。一方の振り返りの場面では、カウンセラー役の体験以上に、話を聴いてもらうクライアント役の相談体験の振り返りを重視して行わせた。特に筆者はファシリテーターとして、個々のペアの振り返りに参加し、自分の話をすること自体がどのような体験であったのか、そこにいてくれるカウンセラーの存在感をどのように感じ、そしてそのカウンセラーの言葉がいかに関わり自分に響いていたかなどについて、多様な角度から問うことを心がけた。カウンセラー役は、うまくできなかつたと感じていながらも、一方のクライアント役からは、ちゃんと話を聴いてもらえたという率直な感想を得て、その意外さに驚き、それがさらにより良い話の聴き方について探求する動機になっているようにも見受けられた（例えば、「持ち主に無くしたことすら気づかれていないノート(仮)」役といったように、動いたり声を出したりすることのできない無生物がもつ悲しみについて相談するペアがあった。その振り返りの中で、カウンセラー役は、相手が無生物であるため、日常的に良く行いがちである行動対処的なアドバイスができなくなった結果、その悲しみをただただ精一杯聴くしかできなかつたという趣旨の感想を述べていた。

しかし一方で、ノート役からはアドバイスをされず、じっくりと悲しみについて聴いてもらったからこそ、その悲しみに潜んでいたノ

ートとしての誇りのようなものを感じられたといったことを述べていた。一生懸命に聴くということが、そのような体験を生じさせることについて互いに驚いている様子であった）。筆者は、そのような個々のペアから得られた振り返りの感想を、クラス全体にもシェアする流れを作ることも大事にした。ペアとクラスの感想の循環性を促進し、動き続ける雰囲気保たれるように努めた。

最後に、本演習における学生の感想をいくつか、本質を変えない形で修正したうえで、報告したい。「これまで上手く聴くという方法ばかりに気が向いていたが、まずはそれらを意識しないようにすることで、逆に楽に関われるようになった。気持ちや思いやりなど自然で率直な態度というのがいかに大切なのかを感じることができた。」「（教科書で知る程度であった）パーソン・センタード・アプローチについて、さらに更に学びたいと思った」といった感想も述べられていた。もちろん、本演習に関する改善点の指摘も多々あった。しかし、それも含めて、その学生が本当に思ったことをまっすぐ私に伝えてくれていると感じられ、筆者は嬉しい気持ちになった。

この短期間の演習で、パーソン・センタード・アプローチを身につけられるわけではない。しかし、自分らしく関わることの面白さや、逆に自分らしく他者と関わろうとするからこそ、自分を磨き続けなければならないという責任性について、少しは触れてもらったのではないかと手前味噌的に考えている。心理演習の改善点はまだまだ多い。心理面接以外の演習パートのさらなる工夫もしていく必要がある。今年度、心理演習を履修してくれた学生たちからいただいた真っ直ぐなエネルギーを糧に、次年度の演習をよりよくするための方法について今から検討したい。

（高等教育研究開発センター  
総合福祉学部 実践心理学科 助教 田中寿夫）

## 先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#2

### 「選択制FDの試み」 佐佐木智絵

#### 「選択制FDの試み」

昨年度から看護栄養学部では、FDを選択制で実施しています。看護栄養学部では、教員の経験年数が幅広く、また教員の入れ替わりも頻繁です。そのため、FDに対するニーズにも幅広いものがあります。また、特に看護学科の後学期には、実習で教員のほとんどが学外に出ているため、全員が参加できるようにFDを企画することも困難です。これは会議なども同様で、委員会や各種会議などと時間の調整も非常に困難な状況になっており、必然的に、教員が比較的学内にいる前学期にFDなどの行事が集中してしまい、負担感が増す事態になっていました。多忙な時期に、ニーズにもデマンドにも合致しないFD研修に参加しなければならない事も多く、必要であるにもかかわらず、FDに対して能動的になれないこのような環境の改善を目指して、昨年度から取り組み始めたのが選択制FDです。

選択制FDでは、教員からFDに対するニーズを聴取し、可能な範囲でニーズにあった研修を複数用意しました。教員は、用意されたFD研修から興味のあるものを一つ以上選択し、参加します。参加後は報告書を提出し、提出された報告書は、その年度のFD活動報告書内に掲載し、共有する事になっています。また、報告書は研修の講師にもフィードバックし、共有しています。FD研修の主催は教育向上委員会ですが、それぞれの企画について、講師担当の教員が企画書を作成し、意図や研修内容を資料で示して研修に参加する教員の学修につながるようにしています。昨年度のものですが、企画書の一部を図1に示しています。

昨年度から始めた取り組みですので、どのような実施方法がよいのかは今年度も模索中です。昨年度は、アクティブラーニングとして特徴のある授業を指定授業として授業参観を行うようにしていました。アンケートでは、他の授業への参観希望もあったため、今年度は広く参観

可能にしています。また、学外から講師を招いて行うFD研修会も企画しており、今年度は『哲学カフェ』について、辻明典先生に研修会をお願いしました(図2)。

選択制FD実施方法などは模索中のところではありますが、昨年度のアンケート調査の結果からは、選択制FDは概ね好評で、昨年度の参加率は100%でした。また、負担感を減らしつつ教員のスキル向上を狙っていたものの、興味がある研修に参加した結果、返って参加する回数が増えてしまったという回答もあり、ニーズにあった研修を企画することで、教員も能動的にスキルアップのための活動ができていることがわかりました。しかし、1学部で実施していますので、内容のバラエティの部分で課題があります。また、ニーズ調査の結果、外部から講師を招聘したい内容が複数ある場合には、講師招聘にあたっての資金的な問題もあります。また、選択制にしたとしても、実習中には参加できない状況は変わりがなく、どうしても前学期に集中してしまう傾向は変わりません。

この選択制FDのモデルとなっているのが、愛媛大学で行われていた、FD研修を単位制とし、全教員に年間で定められた単位取得を求める制度です。10年以上前に行われていた取り組みであることや、全学的に取り組まれていた制度と一学部で行う取り組みとでは大きな差がありますが、知りたいことを学ぶという成人期の学習特性に合った環境を設定することは、FD活動に共通した試みであろうと考えています。今後も、教員も楽しく学び、成長できる看護栄養学部として、活動を継続したいと考えています。

(高等教育研究開発センター  
看護栄養学部 看護学科 准教授 佐佐木智絵)

(画像は次ページへ)

# 先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介#2

## 「選択制FDの試み」 佐佐木智絵

2022年度 看護栄養学部FD企画書		2022年度 看護栄養学部FD企画書	
企画名	グループワークとプレゼンテーションを用いた授業展開：ポスターツアーによる学生間の学び合い	企画名	アクティブラーニングの実践（授業参加型） 大講義における参加型授業の展開：クリッカーを用いた意見の共有
実施日程	2022年6月15日（水）2限、6月29日（水）2限	実施日程	2022年7月26日（水）4限
企画の目的	授業参加型として、アクティブラーニングの実践をみることで、大講義における学生の能動的な学びを促すための展開手法を学ぶ。 本研修会は、アクティブラーニングを積極的に活用している教員の授業を参観し、学生の能動的な学びを促進する授業展開手法のスキルアップを目的として実施する。	企画の目的	授業参加型として、アクティブラーニングの実践をみることで、大講義における学生の能動的な学びを促すための展開手法を学ぶ。 本研修会は、アクティブラーニングを積極的に活用している教員の授業を参観し、学生の能動的な学びを促進する授業展開手法のスキルアップを目的として実施する。
企画概要	看護学科3年生、成人看護学演習において実施している、アクティブラーニングの手法の一つであるポスターツアーの手法を用いた授業の参観を行う。 ポスターツアーは、ポスター作成に加えて、グループの質疑応答を行い、ポスターの理解を共有する手法です。すべてのグループをアグループで回り、自分が作成したポスターを、自分が所属しているアグループに説明し、共有します。全員がプレゼンテーションの機会があるため、フリーライダーが生じにくく、効率的に知識の獲得を促します。本学は大規模講義には向きませんが、本講義ではグループ×教員に分けることで活用している手法です。	企画概要	看護学科3年生、小児看護学演習において実施している、クリッカーを用いた授業の参観を行う。 クリッカーは、教員の質問に対して、学生がレスポンスカードで回答を提出することで、互方向のやり取りが可能になるシステム。レスポンスカードの回答をレシーバーで受信し、質問が表示されているパワーポイント上に結果がグラフなどで集計されて表示される。学生は即時に結果が分かるため授業参加度が高まり、教員は、学生の理解度を把握しながら、授業を進めることができる。
講師（企画者・開催担当者）	看護学科 准教授 佐佐木智絵	講師（企画者・開催担当者）	看護学科 教授 小川絹子
講師より	1・2限連続した演習です。1限はグループワーク中心、2限はポスターツアーによる学びの共有になっています。対象は2限ですが、1限からの参加も歓迎いたします。 成人看護学演習は、紙上事例を用いた看護過程の展開を、主にグループワークで実施しています。この授業では、紙上事例患者の関連図（問語などの因果関係を図に示し、対象者の全体像を把握する）の記載に際するポスターを作成する。学生には事前に付箋紙を配布し、各自で作成した関連図の中に記載している項目を書き出すことを課題としています。どのような項目が抽出されたのか、そのプロセスにあるアセスメントや、理由のつなぎについてディスカッションを行い、プレゼンテーションを行います。	講師より	この授業は、「結果にあることも家庭への看護」について学びます。本学のクリッカーはEdulinkというシステムであり、ソフトをインストールすれば、PCで簡単に設定・回答確認ができます。結果を毎一覧がスクリーンに映される為、回答の有無を簡単に確認できます。一方で回答の表示は、全体の回答数と割合のみが表示されます。個人の回答は明らかにならないため、正確が低い程度であっても回答しやすいという利点があります。Googleフォーム同様、回答は全てエクセルで保存されるため、クリッカーの番号と学生の学籍番号を連携すれば、テストの点数も簡単に確認できます。今回の授業では、「子どもへの死に関する学生の考え」と「授業の振り返りテスト」に活用する予定です。ご興味のある方は是非ご参加下さい。
※参加後は参加報告書に記載し提出のこと。		※参加後は参加報告書に記載し提出のこと。	
2022年度 看護栄養学部FD企画書		2022年度 看護栄養学部FD企画書	
企画名	アクティブラーニングの基礎（演習型） 小グループにおけるファシリテート法：グループワークを活性化させるファシリテートとは	企画名	若手教員向け企画（ワークショップ型） ～こんな学生を担いました。どのようにかわりますか？～
実施日程	2022年7月1日（金）2限（60分予定）	実施日程	2022年7月15日（金）2限
企画の目的	講義形式にて、グループワークを活性化させるファシリテートのコツを習得する。 アクティブラーニングで頻りに用いられるグループワークであるが、活発で効果的なワークに発展するためには、教員のファシリテートが求められる場面がある。特に、効果的でない場面にこそ、教員の介入が必要になるともいえる。この企画では、小グループで実施するグループワークにおいて、活性化を促すファシリテートの基本について説明する。	企画の目的	ワークショップ形式にて、学生指導上で会う対応に困難を感じやすい学生へのかわり方についての意見交換を通じて、バリエーション豊かな学生への対応力の向上をはかる。授業、演習、実習など、特に個別の学生との対応の困難さについて検討する。4月に実施したFDと関連した内容になっている。
企画概要	【ファシリテート：初級編】 ファシリテーションには多種多様な場面に応じた様々な技術がある。初級編では、心構えともいえるファシリテーターマインド、グループを活性化させるファシリテーションの基礎、そして困ったときに使える具体的な技術を提示する。	企画概要	学生演習/臨床実習で、指導が難しいと感じる学生に出会うことが多い。4月の看護栄養学部FDでは、合理的配慮が必要な学生への支援について小児科医師の林教授から講義を受けて、グループでは現職について話し合ったが、もっと時間的余裕があったという意見が多かった。そのため、今回は時間を十分にとり、臨床実習で指導に困る学生の事例を提示してグループで話し合い、対応能力の向上をはかる。
講師（企画者・開催担当者）	看護学科 准教授 坂井志穂	講師（企画者・開催担当者）	看護学科 准教授 永田文子
講師より	ファシリテートは環境設定、グラウンドルールの提示など開始時から始まります。そして、安全な場をどのように作るかが、ファシリテーターに求められる重要なスキルになります。 親しみを覚かせるかもしれませんが、ケアにも通じる部分も多くあります。今回のFDを通して、既存の技術に機能が加わることが期待されます。	講師より	対応に困る学生への指導は、看護と同じで正解はないと考えています。正解はないけれど、様々な人との意見交換によって最善を考えたヒントをつかむことができました。と思っています。日頃、臨床実習における学生への指導について、領域を超えて意見交換をする機会はありませんかと思うので、ぜひこの機会を活用していただければと思います。また、教員として臨床実習の指導年数が長い先生にもご参加いただき、コメントをいただくと、より充実したFDになると思いますので、ご参加をお待ちしています。
※参加後は参加報告書に記載し提出のこと。		※参加後は参加報告書に記載し提出のこと。	

図1 2022年度前学期に開催したFD研修会の企画書

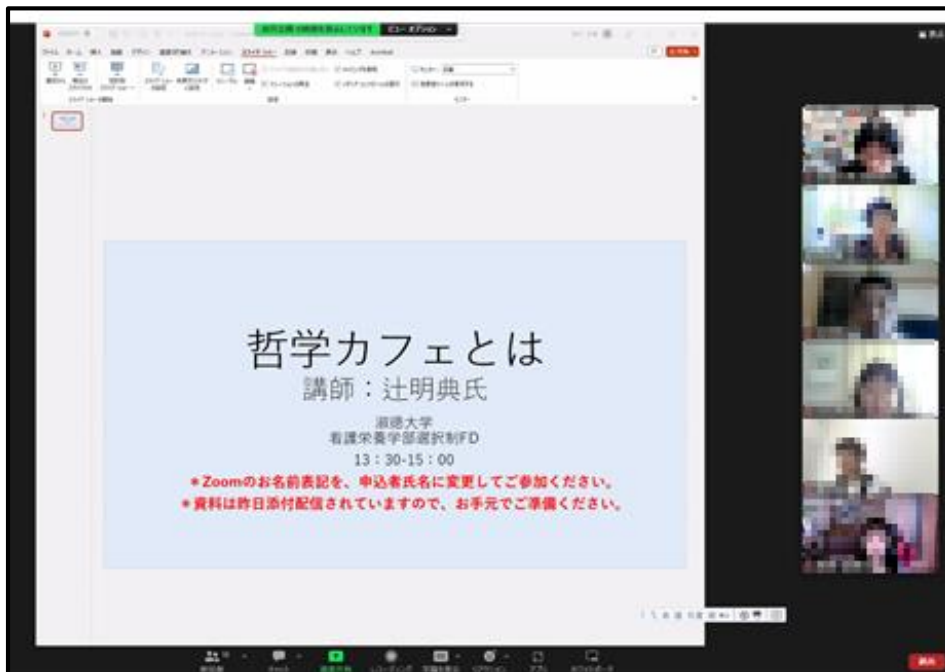


図2 哲学カフェに関するFD研修の様子

「成績評価分布の公表について」 永井 恵一

今年度の高等研における取り組みのひとつとして、成績評価分布の公表に関する検討を進めている。公表により、教育の質保証や、成績評価基準の平準化、授業改善等につなげられることが期待されている。高等研センター員のうち東京キャンパスに所属する教職協働のチームがこれを担当している。本稿では、他大学における成績評価分布の公表の現状を紹介しつつ、検討状況について報告したい。

「成績評価の分布とは」

本学ではGPA制度を導入している。成績評価（S・A・B・C・D）を4～0のGP（Grade Point）に置き換え、全履修科目の平均値（Average）を算出したものである。学修成果の指標として用いられ、成績優秀者への表彰、履修上限単位数の緩和、成績不振者へのフォローアップ等、学生の主体性や学修成果の向上を促すべく様々な場面で活用されている。

成績評価においては、絶対評価と相対評価のバランスのあり方が難しい。能力の高い学生ばかりが履修していれば、SやAといった高い評価に偏ることにはやむを得ない。しかしながら、その事情を知らない人には、その科目は評価基準が厳格ではない、教育の質が低い、GPが高くて信頼できない、といったマイナスの印象につながってしまう。

GPAは奨学金申請の際の選考において考慮されたり、海外留学や就職活動など、公正な成績を示す資料として用いられる場合もある。良い結果が得られるように甘めの成績評価をすることは、学生には喜ばれるかもしれないが、大学の教育の質が疑われ、かえって機会を損なう事態につながりかねない。信頼できるGPA制度としていくことが重要である。

「他大学における取り組み」

① GPA分布の目標値を公表  
（例：東京交通短期大学）」

GPA制度を導入している大学の多くは、成績評価（点数）と評価記号（S～D）、GPの対応を示している。本学においても同様である。それに加えて、成績分布の目標値を公表しているケースもある。東京交通短期大学では、「本学の成績評価は、原則と

して「相対評価」方法を採用している。」と成績評価基準を公表し、次のような数値を掲げている。

（表1を参照）

表1 成績評価分布の目標値の例

評価 (素点)	評価	評価の割合			合否
		割合	人数	割合	
100～90点	S	～7.5%			合格
89～80点	A	～30%			
79～70点	B	～80%			
69～60点	C	～100%			
59～0点	D	～40%			不合格
不受験等	X	対象外			

東京交通短期大学WEBページより  
（2023/10/16確認）

[https://toko.hosho.ac.jp/toukou/evaluation\\_criteria.html](https://toko.hosho.ac.jp/toukou/evaluation_criteria.html)

「他大学における取り組み」

② 学科・学年ごとにGPA分布を公表  
（例：武蔵大学）」

いくつかの大学では、GPA分布の状況を公開している。武蔵大学では、学部ごと、年度ごとのGPA分布を「単年度」と入学後からの「通算」の2種類の方法でヒストグラムにまとめている。GPA0.1きざみの階級ごとの人数と、平均値、下位1/4の点数を公表している（図1を参照）。

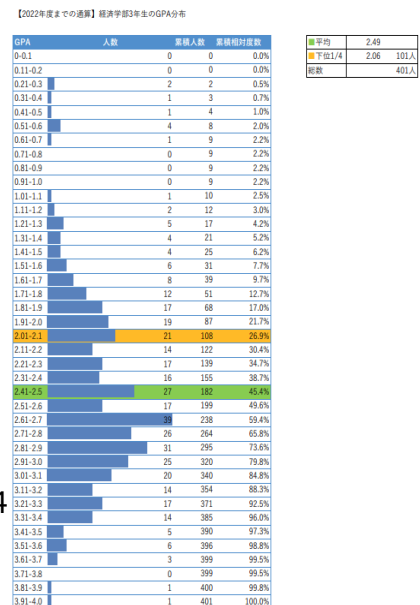


図1 成績評価分布の公表（ヒストグラム）の例  
武蔵大学WEBページより（2023/10/16確認）  
<https://www.musashi.ac.jp/about/disclosure/evaluation/index.html>

（次ページへ続く）

## 「他大学における取り組み」

### ③ 科目ごとにGPA分布を公表 （例：武庫川女子大学、北海道大学）」

科目ごとにGPA分布の数値を公表している大学もある。武庫川女子大学では学科ごとに「科目別成績結果一覧」を作成し、科目GPA、得点分布の数値等のリストをPDFで公表している。また、北海道大学では「成績分布WEB公開システム（成績評価分布状況表）」を公表している。「成績評価の公平性を確保し、学生及び第三者に対する説明責任を果たす」という本学の方針に則り、全学教育科目及び専門科目について、本学HP上に成績分布・GP（grade point）の平均値を公開しています。として、年度や学部、科目名等で検索することで、すべての科目の成績分布のデータを確認することができるようになっている。

（<https://educate.academic.hokudai.ac.jp/seiseki/GradeDistSerch.aspx>）

（図2を参照）

## 「成績評価分布の活用」

取り組みの度合い（どこまで詳細に公表するか）は、各大学の方針によって異なるのが現状である。また、公表の対象（主として誰に向けて公表するか）にも注意を払う必要があると考えられる。

例示したものはいずれも学外に向け一般に公表してい

るものである。教育の質保証、国際的な交流（交換留学等）、企業等との交流（就職活動等）への活用につながるだろうと考えられる。

一方で、一般には公表せずに、学内での活用にとどめている大学も見られる。成績評価基準の平準化にむけた学内でのFDの取り組み等の活用につながるだろうと考えられる。本学においては2022年度第1回高等教育研究開発センターFD（2022/9/1開催）にて、成績評価分布に対する結果の考察が行われた。まずはこのようなレベルから、着実な具体的な活用方法を探るべきだと考えられる。

なお、学生に対しては慎重に検討すべきである。楽に単位が取れるとの誤解を生じさせ、主体的な学修を阻害することにつながる恐れもある。学生向けにはコモンブック、学修ポートフォリオ、ディプロマサブリメントの導入等による方法が別途検討されるべきであると考えられる。

他大学での取り組みや、本学の状況を踏まえつつ、今後の公表のあり方と、活用方法について検討を進めていくことが求められる。成績評価分布の基準については各学部の状況も踏まえ、大学での方針を明確にしていく必要もあるだろう。引き続き教職員諸氏のご助言をいただきながら検討を進めていきたい。

以上

（高等教育研究開発センター経営学部 観光経営学科  
准教授 永井恵一）

経営学科 2022年度 後期 科目別成績結果一覧(基礎・専門教育科目)

2023年4月18日現在

開講年度	科目開講区分	開講所属	開講クラス	科目名	科目区分	科目GPA	履修者数(人)	合格者数(人)	得点分布(100-90)(%)	得点分布(89-80)(%)	得点分布(79-70)(%)	得点分布(69-60)(%)	得点分布(59-0)(%)
1 2022	後期	経営	経営1A	初期演習Ⅱ(経営)	基礎・専門	2.42	48	48	14.6	35.4	27.1	22.9	0.0
2 2022	後期	経営	経営1B	初期演習Ⅱ(経営)	基礎・専門	2.81	48	48	10.4	64.6	20.8	4.2	0.0
3 2022	後期	経営	経営1C	初期演習Ⅱ(経営)	基礎・専門	2.89	45	45	22.2	55.6	11.1	11.1	0.0
4 2022	後期	経営	経営1D	初期演習Ⅱ(経営)	基礎・専門	2.13	46	41	8.7	34.8	28.3	17.4	8.7
5 2022	後期	経営	経営2A前半	経営課題演習Ⅱ	基礎・専門	2.76	17	17	17.6	52.9	17.6	11.8	0.0
6 2022	後期	経営	経営2A後半	経営課題演習Ⅱ	基礎・専門	3.00	17	17	23.5	52.9	23.5	0.0	0.0

図2 成績評価分布の公表（科目別リスト）の例 武庫川女子大学WEBページより（2023/10/16確認）  
<https://www.mukogawa-u.ac.jp/~kyoumuka/grades/index.html>

## 高等研センター年報の近況について



淑徳大学高等教育研究開発センターでは、2023年度に「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第10号」の発刊を予定しております。おかげさまで、多くの原稿をご応募いただきました。誠にありがとうございます。

年報の発刊は11月下旬を目途として作業を進めております。今しばらくお待ちいただけると幸いです。

淑徳大学 高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2023 第2号  
発行日：2023年11月14日  
編集：淑徳大学高等教育研究開発センター  
TEL：03-5918-8948 FAX：03-5918-8968  
E-mail：kaihatsu@soc.shukutoku.ac.jp